武蔵野日曜聖書講筵

わが牧人

――詩篇第23篇――

１９９４年９月11日
小池辰雄

私は信仰なんかありません　一枚の最後に残ったこの衣　向こうへ往って生きる　『本来無一物』　使徒たちの信仰（信行、信交、神交）の次元　和歌山からＫＳさんの手紙

【詩篇23】ダビデのうた

1 **エホバはわが牧者なり、**
われ乏しきことあらじ。
2 **エホバは我をみどりの野にふさせ、**
いこいの水濱にともないたもう。
3 **エホバはわが霊魂をいかし、**
名のゆえをもて我をただしき路にみちびき給う。
4 **たといわれ死のかげの谷をあゆむとも**
禍害をおそれじ。
なんじ我とともに在せばなり。
なんじの笞なんじの杖われを慰む。
5 **なんじわが仇のまえに我がために筵をもうけ、**
わが首にあぶらをそそぎたもう。
わが酒杯はあふるるなり。
6 **わが世にあらん限りはかならず**
恩恵と憐憫とわれにそいきたらん。
我はとこしえにエホバの宮にすまん。

●私は信仰なんかありません

1 **エホバはわが牧者なり、**
われ乏しきことあらじ。

私たちにとっては、キリストが「牧者」です。私は、「信仰」という言葉は嫌いです。

「私は信仰なんかありません」

と言う。信じ仰いだって、しょうがない。キリスト直結です。キリストの中に自分を投げ

入れる。だから、私には信仰なんかない。信仰なんて、そんな二段構えのことは要らない。キリストの中に自分を投げ入れる。平伏して投げ入れる。先ず平伏して、そして、キリストの中に自分を投げ入れます。

「己を棄てる」

というのはキリストの中に棄てるんです。そうすると、キリストは無条件に受けとってくださる。俄然、力がくる、光がくる、生命が来る。これは本当の祈りの秘訣です。何かお願いすることではない。自分を投げ入れることが本当の祈りです。

「祈り入る、祈入する」

こと。これはまた、

「キリストの中に帰り入る、帰入する」

ことです。とにかく、キリストと一つにならなかったらダメです。

「われキリストのうちに、キリストわがうちに」

とパウロが言ったでしょ。あのパウロの現実が本当の現実です。贖ってくださったのだからね。過去・現在・未来の小池なんてものは、もう贖い取られてしまっているから、自分なんか何も顧みる必要がない。もう、平伏して、

「ありがとうございます、あなたの中に入ります」

と、投げ入れる。そうしたら、力がくる。これは本当だもの。いわゆる信仰なんか要らん。だから私は、

「信仰なんかありません、キリストの中に入るだけです」

と言う。もう、非常に簡単になってしまった。

キリストは、

「**われに来たれ**」

という。「汝と共に」ではない。「汝の中に」なんだ。詩篇23篇は、

「われ汝と共に」

ではない。

「汝の中に」

です。なにしろ、聖霊の力でもって、光でもって読まなければダメです、旧約の奥に新約を読まなくては。何も文字にこだわることはない。本当の現実を捕まえていく。これは御霊の力です。十字架されているから。

「十字架・聖霊」というのは、これは離すことができない。十字架の土台があって、それで御霊の中に入る。十字架の土台がなくて、

「聖霊、聖霊」

なんて言っていると、ヘタすると悪霊に変わる。

●一枚の最後に残ったこの衣

賀川豊彦の句、

「一枚の最後に残ったこの衣神の為には猶脱がんとぞ思ふ」

こういうような本当の現実は、無教会の先生方には無かった。賀川先生は本当の証人です。教会と対立して、「無教会」と言う必要は何もない。何だっていいんだ、キリストと直結していれば、どんな群れにいたって、そんなことは問題ではない。

「教会はどうも形式的で……」

なんて批判して、そんな相対的な世界にいるうちは、いつまでたっても始まらない。何だっていいんだ。

「本当にキリストと一つになっているか」

問題はそれだけだ。一つになるというのは、自分が偉いからではない。自分を投げ入れる。どこに捨てるかというと、キリストの中に捨てるだけなんです。捨身（すてみ）というのは、そのことなんだ。

一休和尚は、捨聖（すてひじり）といって、捨身のひとだった。賀川さんも、自分の着ていた上衣を、貧民窟に行って人にやってしまった。賀川さんはとうとうしまいには、ボロを着ていた。賀川さんも一休と同じ捨聖だ。

とにかく、我々も、本当の現実はそのような魂であるということが大事です。「どうした、こうした」ではない。

「無一物無尽蔵」

という言葉があるでしょ。無一物になると、無尽蔵になる。大自然を衣とするようなこと。大自然が家なんだ。それくらいの面魂（つらだましい）に、男でも女でもならないとね。「何があるから、ないから」と、そんなことはどうでもいい。

1 **エホバはわが牧者なり、**
われ乏しきことあらじ。

神さまが、キリストが、わが牧者だから、何も乏しくはない。

2 **エホバは我をみどりの野にふさせ、**
いこいの水濱（みぎわ）にともないたもう。

都会の人は田舎に行って、大自然の中にとっぷりひたることは非常に大事なことです。

●向こうへ往って生きる

3 **エホバはわが霊魂（たましひ）をいかし、**
名（みな）のゆえをもて我をただしき路にみちびき給う。

4 **たといわれ死のかげの谷をあゆむとも**
禍害（わざわい）をおそれじ。

なんじ我とともに在(いま)せばなり。
なんじの笞(しもと)なんじの杖われを慰む。

「キリストはわが霊魂(たましひ)をいかし、名(みな)のゆえをもて我をただしき路にみちびき給う」と。キリストから永遠の生命をいただいたから、我々は死を知らない人間です。

「小池先生はとうとう死んだ」なんて言わないでくれ。

「小池先生は往生した」と言ってくれ。向こうへ往って生きたと。往生とはいい言葉だね。往きて生きる。ヒルティは、

「隣の部屋に行くようなものだ」と言った。肉体は滅びるさ。けれども、パウロが言っているとおり、次の瞬間には霊体をいただく。コリント前書15章に書いてある。霊的な身体をいただいて、次の世界で生きているんだからね。

42死人の復活もまた斯のごとし。朽つる物にて播かれ、朽ちぬものに甦えらせられ、43卑しき物にて播かれ、光栄あるものに甦えらせられ、弱きものにて播かれ、強きものに甦えらせられ、44血気の体にて播かれ、霊の体に甦えらせられん。血気の体ある如く、また霊の体あり。」（コリント前15・42～44）

とある。魂だけではない。魂は霊体をちゃんといただいている。

5なんじわが仇(あた)のまえに我がために筵(えん)をもうけ、
わが首(こうべ)にあぶらをそそぎたもう。
わが酒杯(さかずき)はあふるるなり。
6わが世にあらん限りはかならず
恩恵(めぐみ)と憐憫(あわれみ)とわれにそいきたらん。
我はとこしえにエホバの宮にすまん。

敵の前でも饗宴をしてくださる。私たちは、聖書を読むというと、聖書が食べ物なんです。聖書を食べている。聖言はもの凄い味がある。力がくる、生命がくる。首(こうべ)に聖霊が注がれる。「あぶらをそそぐ」とは、聖霊を注ぐことの一つの象徴的な言い方です。聖霊が注がれて、

「わが酒杯(さかずき)はあふるるなり」

と。われという「酒杯」だ。私たち自身が酒杯で、キリストの霊をいただいている。全身が聖霊の力と生命で満ちる。

あなた方、こういう所にきたら、冥想しなければダメですよ。冥想して、その中に自分を入れなければ。意味の世界ではないのだから。霊的現実の世界だから。

日本人は本当に聖書を読まなければダメだね。今の教育者が聖書を読まなかったら、本当の教育はできないんだ、本当の宗教の力の世界をもってないから。今の少年少女はかわ

いそうだよ、本ものを受けとらないから。どうぞ、誰でもいいから、

「これが本ものだ」

と言って――あなた方お一人ひとりがみな伝道者です――おりにふれて伝道してください。

「聖書を読みなさい」

と。特に新約聖書です。そこらの本屋に聖書を売ってないものな、しょうがないな。仏道でもキリスト道でもいいから、とにかく、本ものにならないとね。

●『本来無一物』

私は『本来無一物』という文を以前に書いたので、お読みします。

「禅宗の第五祖弘忍禅師の門下は七百名の大叢林をなしていたという。師はそろそろ衣鉢を嗣がせようと弟子たちに一偈を作って呈すべく求めた。弟子たちは首席の神秀にはかなわないと思って誰も作ろうとはしなかった。神秀は即ち一偈を案じて廊下に掲げた。

身ハ是レ菩提樹。心ハ明鏡台ノ如シ。
時時勤メテ払拭セヨ。塵埃ヲ惹カ使ムル勿レ。

五祖はこれが神秀の作であることを直覚した。門人たちもこの偈を誦して大いに称賛した。ところが一両日にしてその傍に次のように書いた者がある。

菩提本樹無シ。明鏡亦台ニ非ズ。
本来無一物。何処ニカ塵埃ヲ惹カン。

弟子どもはこれを見て驚きあやしんだ。五祖も之を発見して驚異した。門弟たちがこの筆者を知ったら作者が害されることを虞れて五祖は鞋で擦り消し、「こんなものは何でもない」と皆のものに言い放った。しかし禅師は日頃米搗小屋で碓を踏んでいる農家出身の盧能が非凡な魂であることを認めていたので、ひそかに碓房を訪ねた。禅師は碓を打つこと三下して去った。盧能は師の意を会して夜三更に師を訪ねると仏衣仏鉢を嗣がしめられて一躍第六祖に選ばれた。後の慧能禅師これである。

弘忍禅師は、衣鉢が公認の一番弟子神秀にわたらぬとなると、一大騒動が巻き起ることを察知して未明に盧能を伴れて九江駅に至り着き、自ら艫を把って彼岸に渡してやり、別れに臨み、三年もしたら私は世を去るだろう。汝は南進して期が熟すまでは説法を控えよ、と訣別の言を告げた。盧能は師のこの恩義に感泣して別れた。一か月余も経って大瘦嶺に辿りついた。果せる哉、この事態を知った門弟どもが大挙して追跡して来た。その首領は慧明という男で粗暴な壮士である。遂に盧能の居処を探しあてた。能は明の欲するところを察して、衣鉢の法衣を無造作に石の上に投げた。

「此ノ衣ハ信ヲ表スニ力モテ争フ可ケンヤ、君ノ将去ルニ任ス」

と言い放った。そこで明はこれをとり挙げようとしたが、

「山ノ如クニシテ動カズ」

であった。何もその法衣が物理的に重かったのではない。実は廬能の霊言の響きと法衣にかかっている法威のために強力（ごうりき）の慧明の心も腕も霊縛されて動かなかったのである！　これに参った慧明は廬能の前に身心を投じて法を求め、俄然大悟したのであった。

以上はかの『無門関』に記されてある有名な廬能鉢嗣承のあらましである。

本来無一物、まことに然り。我々は存在そのものが、父母から、民族、社会、国家から、大自然、創造神から賜ったもので、霊界及び自然界のたまものである。我々の住む地球もそれ自体は太陽からのたまものであり、地球とその上の万象は太陽の引力と光熱によって在らしめられている。地球が太陽に絶対依存の存在であるように、魂を中心とした人間存在は神的絶対者に絶対依存している。現代人はこのことにあらためて気がつかねばならない。人間は本来宗教人なのである。

「汝の中に安ろうまでは平安を得ぬように汝は我らを創造した」

とアウグスティヌスが告白している通りなのである。

我々は霊肉共に「本来無一物」的所与である。自分は何ものでもない。神一切である。となして神の中に投身し、即神して生きていた唯一人の例外者があった。それはナザレのイエスであった。

「恵福なる哉、霊の貧者は。天国はその人の有（もの）である」（マタイ5・3、私訳）

これは「山上の垂訓」の第一声であった。私はこれを垂訓というよりむしろ「山上の大告白」と申している。キリストはいかなる一言も全存在的体験から告白しているからである。彼自身、おのれを何ものともしなかった。これが霊の貧者ということである。だから私はキリストを「無者」と申している。彼にとって天国とは神そのものであった。だから神と自分とは一如だということであった。無者となったら、即無限無量者となったということである。だからキリストは「我を見し者は父（神）を見しなり」とか「我と父とは一つなり」とか言えた。何とすばらしい在り方だろう！「無的実存」と私は申している。信仰の奥義は実はこの境地にある。我々が如何にして質的にいささかなりともそのような境地につらなり得るかについては別な機会に語らせていただこうか。

民主とか自由とか自主とかいうけれども、実は神仏の前に無条件降伏しない限り本ものとはならない。南無阿弥陀仏、南無妙法蓮華経、南無キリストである。南無とは帰依、帰入、祈入である。そのとき初めて霊止（ひと）（神霊の止まりたる存在。大言海参照）となる。東西の政治家たちが豁然とこのことに目醒めて、イデオロギーはイデオロギーでよいから、超イデオロギーの世界に躍り込んで本当の霊止（ひと）となり、人間愛を以て握手しない限り、この世紀末は本当に危ない。

政治家と言わず、あらゆる社会層の人々が、特に教育者がこのことに醒めて、精神革命を起こせよ、青年よ、東西の大宗教家を学んで立ち上がれ！と申したい。」（小池辰雄著作集第六巻『随想集』209頁参照）

●使徒たちの信仰（信行、信交、神交）の次元

聖霊の力は凄いですよ。私は今まで時々、体験したことがありますけれども。病気なんか即座に治ってしまうからね。そういう御霊の力がきてから、私はもう病気にかからなくなってしまった。私の育った無教会には全然そういう力がない。一般の教会もそうです。これはやはり、使徒たちの信仰（信行、信交、神交）の次元にこなければダメなんです。パウロ、ペテロ、ヨハネ、そういう使徒たちはキリストの霊的な力をいただいている。なにしろ、イエスというひとは波の上を渡っていくような大変なひとだから。物理法則を越えてしまう。日蓮が時にそういった力を現したことがありますけれども。お釈迦さん自身が非常に驚いたことがある。

「それは如来の本来の姿が実は自分の中にきていた」

と言って驚いた。本ものの世界というのは凄いところだからね。だから、

「私は信仰なんかありません」

と言ったでしょ。信仰なんていう、二段構えの世界ではない。直結の世界、キリスト直結です。どうぞ、皆さんも、冥想して、そういう現実に祈り入ってください。そうしたら、何だか知らんけれども力がきてしょうがない。非常に楽になる。楽で力がきてしまう。

私が育った無教会は観念信仰だった。無教会に長くいて、随分時間的にはロスが多かった。聖書の研究とばかり言っていた。ギリシヤ語やヘブライ語を勉強して

「ギリシヤ語やヘブライ語が分かれば聖書がより分かる」

なんて、冗談いうなと言いたい。日本語でたくさんだ。

「その奥の響きが本当に感ぜられるか」

ということです。

●和歌山からKSさんの手紙

ところで、和歌山に行ったKSさんから私に手紙が来ましたので、お読みします。

「わが敬慕する小池先生。

私は今、トルストイの農村童話を読みながら、去りし日の小池先生のことを思い浮かべています。

ある所に大地主がありました。老年になって、三人の息子に所有地を分かち与えようとして、既に家庭を持っている長男と次男と、未だ独身のイワンの馬鹿と呼ばれる第三男に対して、「お前たちが一日かかって歩き回っただけの土地をやろう」と発議し

ました。長男と次男は大いに喜んで、翌朝早起きしてさっそく出かけました。ところが、三男は出かけようとする気配がありません。父親は尋ねました、「お前はどうするのか、土地は要らないのか」と。三男は「わしは今日は麦刈りで忙しいから、畑仕事に出かけます」と答えた。

長男と次男はさっそく家をとびだした。ちょうど真夏の頃とて、中央ロシヤの草原は日が昇ると、草いきれでもってムンムンと鼻につきます。日射の中を行けども行けども、地平線が大空を横切っている大平原です。二人は歩いた距離を測る棒杭を入れた布袋と弁当と水筒を背負って急ぎました。足の長い長男はどんどん次男をぬいて、長男の姿は草原のかなたに次第に小さくなっていきました。やがて太陽は中天に昇って強い光を浴びせるので、下界は焦熱地獄です。流れる汗をふきながら、コンパスの短い次男も精をだします。そして、四キロ毎に自分の名をしたためた杭を地面に打ち込んでいくのです。昼がきても、弁当を食べる気になれません。先を急がねばならないのです。しかし、直射光を浴びた次男の足どりは疲労のために遅くなります。そのうちに、めまいがして気が遠くなりました。ちょっとした穴地で足を踏みすべらせたと思った瞬間に頭がグラグラして、どっと倒れて大地に大の字に仰向けになって、そのまま気を失ってしまいました。二人は夜になっても帰ってきません。次男は日射病で、長男は心臓発作で死んでいました。

草原で夫を亡くした二人の後家には子供がありました。しかし、二人の後家は、一家を支えた大黒柱を失ったために畑作りの収穫が減って、その年の暮れには、三男のイワンの馬鹿に食糧の援助を頼むより仕方がありません。すると、イワンの馬鹿は言いました、「ああ、いいとも。小麦の方はついて粉にして麻布に入れて納屋にしまってあるから、それを必要なだけ持っていきなさい。だが、兄さんたちがいなくなって、俺も寂しくなったよ」。

トルストイが教えたこの童話のモラルは、土地の広さの問題ではなく、土地は狭くとも毎日野良で汗して働くことであるということです。この童話の中でトルストイの深い宗教観と人生観を覗くことができます。トルストイのこの世での遺言は「私にはこの二人の他に用はない。それはキリストとイワンの馬鹿である」という言葉です。私はこの言葉に打たれて泣きました。実は私は中学二年からトルストイが好きで、トルストイの本ばかり集めておりました。今、このトルストイの言葉に泣きくずれる自分を見つめています。

私は、先生もご承知のとおり、穴だらけの人間です。欠点だらけの人間です。罪深い人間です。そういう矛盾の中で僧として出家して、富士山で智慧遅れの子供たちのためにやってきました。それから、ニューヨークで突然、神に召されて牧師になりました。今、この言葉に感激している裏面には、先生の言葉がありました。「イエスに投身、

祈入せよ」という先生の言葉は、自分が孤独のどん底の中でもがき、「神さまどうすればよいのですか」と、もがき泣き叫ぶときでないと分からない。先生の霊的体験からほとばしったこのお言葉は大切です。それを私は今分かりました。それを今悟りました。そうです、イエスの胸に飛び込んで投身しなければ、宇宙が見えません。宇宙の大生命体としての神さまが見えません。イエスさまの胸に飛び込むことです。投身祈入することです。イワンの馬鹿は民衆です。ロシヤの民衆だけでなく、世界の迷える小羊たちです。これを愛するには、イエスさまの胸に投身祈入しなければ、できないのです。

私の場合は、智慧遅れの子供たちでした。今、和歌山にきても、社会から問題になって軽蔑されている人、三人と暮らしています。私はこの頃、厳しい反省と懺悔と祈りの中で感知せられるものがあります。「障害者を優先する教会を、障害者と一般人と共に祈る教会を日本のどこかに建てよ」という声が聞こえてきました。私の使命はこれだと分かりました。そのため、予備運動として禅僧時代に富士山で私に神さまが訓告されたということを知りました。私は今一生懸命に托鉢しています。門前、門前の祈りとして、九月三十日から二週間、アメリカに托鉢に出かけます。涙の説教、告白をしながらの托鉢です。日本に障害者を優先する教会を建てるために、今私の教会には精神病院生活を長年やった人と、目の障害者がいます。その目の障害者が私たちの教会の総務をやっています。十一月中旬には韓国に托鉢に出かけます。

私の為すべきこと、生命を賭けて為すべきことは、イエスさまを愛して、イエスに投身祈入することです。このイエスの中に釈迦あり老子ありです。それ故にイエスなくして私は生きることができません。

小池先生、本当にありがとうございます。感謝、百千倍。アーメン！

一九九四年九月八日　　主の僕　ＫＳ」

そういう手紙を――非常に渾身の手紙ですね――大事な手紙をいただきました。Ｓさんはそのようにしてこれからやるということです。これは皆さんにお伝えせざるをえなかった。

賀川さんの

「一枚の最後に残ったこの衣神の為には猶脱がんとぞ思ふ」

という言葉。なにしろ、私たちも、それぞれの生活や仕事をしながら、キリストのためには一切を捧げていく。生活そのものが献身である、という気持でやっていきましょう。我々はいわゆる観念信仰とはもう縁がない。それぞれ福音を体現することです。